To the Lighthouse における Mintaをめぐって

——Woolf, Mansfield, モダニズム——

榊　原　理枝子

1

ヴィクトリア朝の空気がいまだ濃厚に残っている20世紀初めのRamsay家の別荘での一日を描いているVirginia Woolfの*To the Lighthouse*（1927）の第一部で，結婚こそが幸福と信じているMrs. Ramsayは，別荘に過ごしに来ている24歳のMintaを，やはりRamsay家の客である青年Paulと結婚させる。*To the Lighthouse*において周辺的な存在であると言わざるを得ないMintaは，何者なのであろうか。彼女は*Middlemarch*を電車に置き忘れ，最後まで読んでいないので，George Eliotについて語っていたMr. Ramsayとの会話についていけないというエピソードがある（*To the Lighthouse* 83-84）。このエピソードの背後にあるものを考えることから始めたい。まずは，Woolfにとって，*Middlemarch*そしてGeorge Eliotとはいかなるものであったのかを確認するために，女性と文学に関するWoolfの見解が展開されている*A Room of One's Own*（1929）を見ることにする。

> For if *Pride and Prejudice* matters, and *Middlemarch* and *Villette* and *Wuthering Heights* matter, then it matters far more than I can prove in an hour's discourse that women generally, and not merely the lonely aristocrat shut up in her country house among her folios and her flatterers, took to writing. Without those fore-

runners, Jane Austen and the Brontës and George Eliot could no more have written than Shakespeare could have written without Marlowe, or Marlowe without Chaucer, or Chaucer without those forgotten poets who paved the ways and tamed the natural savagery of the tongue. For masterpieces are not single and solitary births; they are the outcome of many years of thinking in common, of thinking by the body of the people, so that the experience of the mass is behind the single voice. (*A Room of One's Own* 59–60)

というのは，もし *Pride and Prejudice* が重要で，そして *Middlemarch*，*Villette*，*Wuthering Heights* が重要なら，二折版やお追従者に囲まれて田舎の邸宅に閉じこもっていた孤独な貴族の女性だけではなく，一般の女性がものを書き始めたことは，私が1時間の講演で明らかにするなんてことがとてもじゃありませんが不可能なくらい，重要なことなのです。これらの先駆者たちがいなかったら，Jane Austen も Brontë 姉妹も George Eliot も，書くことはできなかったでしょう。Marlowe がいなかったら Shakespeare が書けなかったでしょうし，Chaucer がいなかったら Marlowe も書けなかったでしょうし，先立って道をつけ，その頃の言葉の生来の粗野さを手懐けた忘れ去られた詩人たちがいなかったら，Chaucer も書けなかったでしょうということと同じように。傑作はそれだけが単独で生まれてくるのではないのですから。つまり，傑作とは長年にわたってみんなが考えたことの，大勢が考えたことの成果なのです。だから，一つの声の背後には大勢の人の経験があるのです。

Woolf は，18 世紀末に中流階級の女性が文筆活動を始めたという歴史上の転換期(59)に続いて，無数の名もない女性作家たちがものを書くようになったと述べ，そしてそのような伝統があったからこそ，偉大な女性作家たちが現れたと考えている。そういった偉大な女性作家の伝統のはしりとして Jane Austen，Brontë 姉妹，そして George Eliot を彼女は挙げている。

Woolf は，Eliot を女性が文筆活動をするという歴史のなかで生まれた偉大な作家であると認識しているのだ。また，もともとは 1919 年の *Times Literary Supplement* 誌上で発表した Eliot 論で，Woolf は，*Middlemarch* を「壮大な本で，不完全なところもあるが，大人のために書かれた数少ないイギリス小説（*English novels*）」（"George Eliot" 175–76）と評している。さらに，1921 年の *Daily Herald* 紙に寄せた記事では，Eliot を「男も女も同じように考えたり感じたりするということを発見した最初のイギリスの小説家たち（English novelists）のうちの一人」であるといい，*Middlemarch* については「*Silas Marner* よりは芸術的完成度が低いものの，イギリスの小説（English novels）のなかでもっとも面白いもののうちのひとつ」と述べている（"George Eliot (1819–1880)" 294)。

Woolf が Eliot を女性作家の伝統と不可分な作家と認識していること，さらに，Eliot を，そして *Middlemarch* を語るのに，English という言葉を繰り返し用いていることに注意したい。まさにイギリス性と強烈に結びつけて，Woolf は Eliot と *Middlemarch* を捉えているのである。

そしてさらに，*Middlemarch* を電車に置き忘れたというエピソードは，Minta が女性作家の伝統を重視しない女性であるということを示している。女性作家にとって男性作家は規範を提供するものではなく，19 世紀前半の女性作家たちの背後には伝統が全くなかった，あるいはほとんど助けにならないほどの浅い，断片的な伝統しかなかったということが，彼女たちにとっての一番の困難であったと Woolf は言っているが（*A Room of One's Own* 69)，Woolf にとってこれほどまでに貴重な女性作家の伝統に，Minta は大して価値を見出していないということを暗示しているのが，*Middlemarch* を置き忘れてきたという行為なのである。そしてさらに，Woolf が Eliot を，そして *Middlemarch* を，イギリス性と結び付けていることを考慮すると，*Middlemarch* を電車に置き忘れてきたというエピソードは，Minta がイギリス性を共有しない文化的他者であるということの指標であるという見方ができる。

2

ところで，*To the Lighthouse* が書かれた当時の文学史を見てみると，ヴィ

クトリアニズムとモダニズムの重なり合うところに，*To the Lighthouse* のテクストがある。*Times Literary Supplement* に 1919 年に掲載した "Modern Novels[1]" で，過去の伝統の繰り返しではない新しい小説への意気込みを示し，Woolf はモダニズムの宣言をする。1924 年に行った講演をもとにしたエッセイ "Mr Bennett and Mrs Brown" で Woolf は，「1910 年 12 月かそのあたり」[2] に，「人間性」が「変化」し，「すべての人間関係」も「変化」し，「宗教，行動，政治，文学」においても「変化」があらわれたと述べている(70-71)。こうした「変化」は急激ではっきりしたものではなかったので，この年代は，「いつでも恣意的なのが人というものだから，それを 1910 年ごろに設定しましょう」(70)という Woolf が「恣意的」に選んだものであった。Woolf は，20 世紀初めごろの，それまでの価値体系や秩序が解体し，それに取って代わるものが生まれつつあったという転換期の感覚を感じて，新時代の到来を宣言したのだ。その一方で，たとえば Gillian Beer が Woolf の基底にあるヴィクトリアニズムの存在を指摘しているように(92-111)，Woolf のテクストは，ヴィクトリアニズムとの連続でもあって，単にヴィクトリアニズムの伝統を拒否しているだけではなく，その伝統を書き直しているという側面もあるのである。このような過渡期の相反する特性を引き受けている面も，モダニズム作家の特徴であるといえる。

過渡期であるがゆえの，多様性と対立を内包したモダニズムの性質を，Malcolm Bradbury and James McFarlane は革命的なものと保守的なものの複合と見ているし(20)，Wallace Stevens は解体を通して新たな価値の創造の可能性をみるモダニズム論を展開している(174-75)。このようなモダニズムの骨格をなす性質を前提としつつ，Patrick Williams による最近のモダニズム解釈から，より詳細なモダニズムの特徴を見てみよう。Patrick Williams の議論のなかで，今回特に注目したいのは，モダニズムと帝国主義を視野に入れたうえでの，モダニズムとヨーロッパ中心主義との関連に関するものである。Patrick Williams は，モダニズムを，作家や知識人が帝国の中心にやってきたという，Edward W. Said が *Culture and Imperialism* で Voyage In と呼んでいる現象をも含む文化的実践というよりも，西洋の大都市に流入してきた知識人による産物だとみなしている(24)。さらに，植民地支配を行う側による文化的支配としてのモダニズムではなく，植民地

支配を受ける側の集合的抵抗としての，反植民地主義としての文化レベルの反乱としてのモダニズムの可能性があることを，Patrick Williams は指摘している(26)。

文化レベルでの反抗としてのモダニズムに注目するとき，そして 20 世紀前半の文化的に支配的なコードであったヨーロッパ中心主義を見据えて *To the Lighthouse* の Minta を見るとき，彼女が両親から逃れて，Ramsay 家にやって来ていたことが，意味深く見えてくる。Minta が Ramsay 家に来ていたということを，彼女の生家への無言の反抗，つまり象徴的な意味での Voyage In であると解釈することができるからだ。こうした Minta の存在を，Voyage In として植民地ニュージーランドからモダニズムの中心である本国イギリスにやって来たモダニズム作家 Katherine Mansfield と重ね合わせて見ることで，*To the Lighthouse* の読解に新たな可能性を見出せるのではないか。本稿は，これまで *To the Lighthouse* 読解において中心的関心の対象にほとんどされてこなかった Minta に，とりわけその文化的他者としての側面に注目して，その表象を，Woolf の日記や手紙から読み取れる Mansfield に対する複雑な感情を視野に入れつつ，検討することを狙いとしたい。

3

Minta は Mrs. Ramsay が願ったとおり，Paul と婚約する。イギリス最優位の歴史観が崩壊する前の，ヴィクトリア朝の社会的安定を基本から支えてきた単位としての家庭，まさしく Ramsay 家のような家庭を，Minta も再生産するかのような兆しを見せて，第一部は終わる。第一次世界大戦後のイギリスは戦勝国とはいえ，戦争による損害も大きく，戦前のような国際的に優越した地位を失った。イギリスは戦争を通じてアメリカの債務国となり，戦後のヨーロッパの購買力の減少や，アメリカや日本の進出などによって輸出が大幅に減少し，もはや戦前のような経済的な地位を維持することはできなくなった。そして大戦をはさんだ第二部の，10 年ほどの年月を経過した第三部で，Minta は Paul との夫婦関係崩壊の危機を迎える。が，「過激な政治思想」――おそらく既存のイデオロギー体制を破壊しようとするものであろう――を Paul と共有する彼の愛人を含んだ友情によって，Minta は

夫婦関係を立て直し，彼女は幸福だという。このような Minta のあり方は，彼女がイギリス家父長制を拒否し，それを根底から揺るがす女性であることを示す。Minta は，イギリス家父長制にとっての他者なのだ。

ここで想起したいのは *Between the Acts*（1941）に登場する Mrs. Manresa である。植民地オーストラリアの出身という，イギリス社会にとっての他者のイメージをはっきりと付与されている Mrs. Manresa は，野蛮で色欲の強い自然児（wild child of nature）で，経歴などのあきらかでない人物とされている。そして，夫である Ralph Manresa 以外の「夫」の存在(37)などが示すように，イギリス家父長制の制度からはみ出した存在である。

この Mrs. Manresa の人物造形の一部は，植民地ニュージーランド出身の Mansfield に負っている[3] と指摘する論者もいるが（Gay；Haller；手塚），Judith L. Johnston は， Woolf が Mansfield のほかに Woolf の姉の Vanessa をもモデルにしていると指摘している(268)。Vanessa は，1907 年に Clive Bell と結婚し，第二子が生まれた 1910 年ごろから Roger Fry との恋愛が始まり，Fry から心が離れてからは Duncan Grant と親しくなり，1913 年には夫と Fry，Grant との 4 人でイタリア旅行をしている。その Vanessa に，1917 年に Woolf が送った手紙には，次のようにある。

> I have had a slight rapprochement with Katherine Mansfield; who seems to me an unpleasant but forcible and utterly unscrupulous character, in whom I think you might find a 'companion'—（*Letters,* 2 : 144）

> Katherine Mansfield と少し和解しました。彼女の性格は不愉快ですが，力強く，全く無節操に私には思えます。お姉さまは彼女に「仲間」を見出すのかもしれないと私は思うのです。

ところで，Vanessa と同様に，そして *Between the Acts* の Mrs. Manresa や *To the Lighthouse* の Minta と同じく，既存の夫婦関係の概念を，Mansfield もまた踏み越えてしまっていた。1909 年に George Bowden と結婚したものの，結婚した日に Mansfield は夫のもとから逃げ出した。彼女は，

始めは彼女の下宿人，すぐに彼女の恋人となった John Middleton Murry と 1912 年から一緒に暮らし，実質的には夫婦関係にあった。実際に結婚するのは Bowden との離婚が成立した 1918 年である。が，1915 年 2 月には Francis Carco を追って戦時下のフランスに行くことにし，出発する Mansfield を Murry は見送る。Carco と Mansfield は 4 日間の一緒に暮らしたもののその恋は終わり，Mansfield はロンドンの Murry のもとに戻ることにし，それを Murry に電報で知らせる。彼は，Mansfield を迎えに駅まで行く（Alpers 175–77）。

この Vanessa への手紙で Woolf が念頭に置いているのは，いま紹介したものをはじめとする数々の恋愛や冒険など，意識的に既存の価値観を破壊しようとする Mansfield の生き方であろう。Mansfield に「仲間」を見出すのではないかと，Vanessa に向かって Woolf が言っているのは，家父長制の前提としての夫婦関係を，彼女たちが意図的に破壊しようとしていたそのあり方の共通性であると考えられる。Woolf は，Mansfield の「無節操」に不快感をおぼえながらも，「常に体面を気にしてきちんとしていた」という彼女自身とは対照的な Mansfield の大胆さを賞賛したし，そうした性質を必要としていた（*Letters,* 4 : 366）と，Mansfield の死後 8 年あまりが経過してから V. Sackville-West への手紙に書いている。つまり，Woolf は日記や手紙で Mansfield をしばしば「安っぽい」（cheap）と評していることに示されるように，Mansfield の下品さには辟易していた。が，その一方で，Angela Smith が言っているように，Mansfield の経験によって生まれる文章に，Woolf が嫉妬を感じた(37)のは確かであろう。無節操で下品であると感じ，見下し，Mansfield が書いた *Night and Day* の書評には苛立ちをおぼえ，悪意すら感じていたものの（*Diary,* 1 : 314），行動力があり，それゆえに Woolf なら決してしないであろうさまざまな経験をして，それを文章に生かせた Mansfield を，Woolf は評価もしていた。

4

Woolf を驚愕させた Mansfield に対し，Woolf は「無節操」（unscrupulous）と言っている。Woolf は Mansfield の派手な装いやきつい香

水が不快であっただけではなく，彼女の恋愛を無節操と感じていたのではないかという推測を可能にするくだりが *To the Lighthouse* にある。

> He turned on her cheek the heat of love, its horror, its cruelty, its *unscrupulosity*. It scorched her, and Lily, looking at Minta, being charming to Mr. Ramsay at the other end of the table, flinched for her exposed to these fangs, and was thankful. (*To the Lighthouse* 87, my italics)

> 彼（＝Paul）は恋の熱を，恐怖を，残酷さを，その無節操さを，彼女（＝Lily）の頬に浴びせた。それは彼女を焦がし，テーブルの向こうの端で Mr. Ramsay にお愛想をふりまいている Minta を見ながら，これらの毒牙にさらされている Minta のためにたじろいで，自分はそんなことがないからありがたいと思った。

だらしないところもあり，無鉄砲で知性のない Minta とは対照的に，33 歳で独身のアマチュア画家 Lily は，Mrs. Ramsay に 40 歳になれば Minta より Lily のほうが立派になるであろうと思わせる(44)ような，華やかさはないが思索的な女性として描かれている。その Lily にとって，恋愛とは上の引用で見たように，おぞましいものなのである。さらに，Mansfield の性格を言い表すのに用いた「無節操」(unscrupulous) という判断を，ここでは恋愛に対して下している。このような恋愛への恐怖の表象を，*Mrs Dalloway*(1925)にも見出すことができる。そこでは，「恋愛もまた破壊する。精巧なもの，真実なものはすべて去って行く。」(*Mrs Dalloway* 165)と恋愛の破壊力を描き出している。つまり，おぞましいものとしての恋愛というイメージを Woolf は小説テクストにおいて作り出し，色欲という特性を野生児 Mrs. Manresa に付与したことで，おぞましさを野蛮と結びつけ，それを植民地民に見出しているのだ。帝国主義時代のイギリス人にステレオタイプなバイアスを，Woolf もまた共有していたことが分かる。ここで Woolf の差別意識を問題にするつもりはなく，Mrs. Manresa により濃厚にはっきりした形で与えられている野蛮の表象が，Paul との恋のただなかにある

Minta にも，間接的なかたちで与えられているということを主張したいのだ。つまり，Minta も，Mrs. Manresa と同様に野蛮であり，すなわちイギリス性を共有しない，イギリスにとっての文化的他者であるということである。

さらに Mrs. Manresa が「行動的な女性」(woman of action) (99)であるとされているのと同様に，Minta にも行動力が付与されていることを示しているのが以下の箇所である。Ramsay 家の息子の Andrew たちと一緒に浜辺を散策しているときに，Andrew が Minta を観察して次のように思う。

> She would jump straight into a stream and flounder across. He liked her rashness, but he saw that it would not do—she would kill herself in some idiotic way one of these days.... She didn't seem to mind what she said or did. (*To the Lighthouse* 64)

> 彼女(=Minta) は，小川に飛び込んで，もがきながら横断する。彼(=Andrew) は，彼女の無鉄砲さが好きだが，あれでは駄目だと判断していた。そのうち何か馬鹿なことをして死んでしまうだろう。... 彼女は自分の言うこと，やることを気にしていないようだ。

Minta はこの後，突然歌い始め，散策の一行は，「合唱に加わり，一緒に叫ばなくてはならない」(65)のであった。Mansfield について Woolf が書いている手紙の描写に，散策中の Minta の様子を描いたこの箇所と重なり合うものを見出すことができる。Vanessa に宛てた 1917 年の手紙に，「昨夜，K. Mansfield と妙な話をしました。彼女は 17 歳の頃からあらゆることをしてきたらしく，それは興味深いのです。」(*Letters,* 2: 159)と書いている。1918 年の手紙で，Woolf は Mansfield のことを，「スコットランドの原野をサーカスと一緒にさまよったりして，あらゆる種類の経験をしてきた」(*Letters,* 2: 248)と書いているし，1913 年には次のように書いている。

> I mean, that she had a quality I adored, and needed; I think her sharpness and reality — her having knocked about with prostitutes and so on, whereas I had always been *respectable*—was

the thing I wanted then. (*Letters,* 4 : 366, my italics)

私が言っているのは，彼女は私が賞賛し，必要としている性質を持っていたことなのです。というのは，私は彼女の鋭さとリアリティー—彼女が売春婦と一緒に放浪してきたことなど，それに対して，私はいつも体面を考えてきちんとしていた—を考えていて，それはあの頃私が欲しかったものだったのです。

Alpers によると，Mansfield の育ち方は，Woolf よりはヴィクトリア朝のモラルのコードから自由であった(18)というが，それを考慮に入れても，Mansfield は Woolf を驚かせて余りある経験をし，先に引用した箇所の Minta に通じる，何ものも気にしない奔放さと無鉄砲さを特性としていた。そして Woolf は，Mansfield のような奔放な行動力を，ヴィクトリア朝に確立された行動規範としての respectability の対極にあるものとして認識していたことが，ここに引用した手紙から分かる。換言すれば，大胆な行動性とは，Woolf にとっては，ヴィクトリア朝以来の価値意識を共有しない文化的他者，さらに言えば野蛮の表象であり，また，Mansfield の行動力とは，文明化されていないからこその野蛮のしるしであった。実際の Mansfield はどうであったのかという問題とは全く別に，Woolf が，彼女自身の Mansfield 像，すなわち植民地ニュージーランド出身の野蛮人という Mansfield 像を作り上げていたということを指摘することができる。

また，先に引用した箇所で，Andrew が Minta の死を予感しているが，これも見過ごしてはならないであろう。*To the Lighthouse* では，死ぬのは Minta ではなく，第二部の第一次世界大戦で戦死する Andrew 自身であるというアイロニーをここに指摘することができる。Minta の死を物語的アイロニーを喚起するためのレトリックとして捉えるだけではなく，Minta がその一部を負っている Mansfield の死と結びつけることもできよう。Woolf は *To the Lighthouse* を 1925 年ごろから構想し始め，1927 年に出版している。その頃にはすでに Mansfield は，Woolf には計り知れないようなさまざまな冒険をしたのちの 34 年[4] の短い生涯を閉じていた。散策する Minta の描写の背後には，Mansfield の激しい生き方があり，日記や手紙

からその一端を窺い知ることができる Woolf の作り上げた Mansfield 像が，Woolf の小説テクストとの連続にあると考えられるということを，ここで主張したい[(5)]。

5

Woolf は Jacques Raverat 宛ての 1923 年 7 月 30 日の手紙のなかで Mansfield を次のように評している。

> Please read Katherine's works, and tell me your opinion. My theory is that while she possessed the most amazing *senses* of her generation so that she could actually reproduce this room for instance, with its fly, clock, dog, tortoise if need be, to the life, she was as weak as water, as insipid, and a great deal more commonplace, when she had to use her mind. That is, she can't put thoughts, or feelings, or subtleties of any kind into her characters, without at once becoming, where she's serious, hard, and where she's sympathetic, sentimental. (*Letters,* 3 : 59)

> Katherine の作品を読んで，私にご意見をお話ししてください。私の考えでは，彼女はあの世代では一番目覚しい感覚を持っていて，もし必要なら，たとえばこの部屋を，ハエも，時計も，犬も，亀も，寸分たがわず再現させることが実際にできましたけれど，水のように弱くて味気なかったですし，知性を使わないといけないようなときには，さらにずっと平凡でした。つまり，彼女はあらゆる種類の思想や感情や微妙さを登場人物に注ぎ込むと，たちまちのうちに必ず，彼女が真剣な箇所では固く，彼女が同情的な箇所ではセンチメンタルになるのです。

感覚は優れているものの，知性のない作家として Woolf が Mansfield を見ていることが分かる。こうした見下しの視線の背後には，Woolf よりも早

い時期から評価されていたMansfieldへの嫉妬[6]が起因しているということは否定できない。

さらにWoolfは，Mansfieldを下の階級の者として見下していたといわれている。1931年にV. Sackville-Westに宛てた手紙に，Woolfは，Mansfieldに関して，「私は彼女を安っぽいと思ったし，彼女は私を取り澄ましていると思っていた。」(*Letters,* 4: 336)と書いているということも，Woolfが，彼女たちの間の壁を，階級差とそれが生じさせる態度や気質の違いであったと考えていたことを示している。Woolfは，著名な哲学者・評論家であったLeslie Stephenの娘として生まれ，学校教育は受けなかったものの，父の膨大な蔵書を自由に読むことを許されていた。さらに，知的エリート集団であったブルームズベリーグループは，Woolfに多大な文学，芸術上の影響を与えた。一方，Mansfieldは，植民地ニュージーランドのブルジョワ家庭の出で，進歩的なロンドンの女学校Queen's Collegeで高等教育を受けたものの，イギリスのインテリ界では常に周辺的な場所にいた。Mansfieldの活躍の場は，彼女の周辺性をあらわしている。編集者A. R. Orageと*New Age*誌で手を組み，*Athenaeum*誌の編集者のJohn Middleton Murryと結婚し，Mansfieldは，Woolfやブルームズベリーグループのメンバーが「文学的な下層社会」(literary underworld) と考えていた世界の作家であった。Woolfは，彼女とMansfieldの間の階級差を取り除こうとしていたが，階級差は常に，そしておそらく最終的な，彼女たちの分かれ目だったとPatricia Moranは判断している(12)。

さらに，WoolfのMansfieldへの軽蔑の視線には，19世紀末から1920年代半ばまでの，ニュージーランドへのイギリス人の視線が反映されている。二人の作家の間にあった壁は，社会的な階級差によるものであっただけでなく，無論，階級の問題と表裏一体をなすものであったであろうが，当時のイギリスとニュージーランドの関係が投影されていた。彼女たちがそれを意識していたかどうかということは問題ではなく，motherland/dominionというイギリスとニュージーランドの国家間の関係が，個人間の関係をも規定する要因のひとつになりえたという時代の力を否定することはできない。1840年，原住民マオリ族とのワイタンギ条約によって，ニュージーランドは正式にイギリスの植民地となり，本国イギリスからの労働・資本投入によるイン

フラ設備および対イギリス貿易に大きく依存するかたちで経済的発展を遂げてきた。たとえば，1903年に出版された *The Trade Relations of the British Empire* に，ニュージーランドはイギリス以外のヨーロッパ諸国との交易はまったくといっていいほどなかった(Root 68)とあることからも窺えるように，こうした経済的な依存の関係が，イギリス人一般に植民地出身者に対する優越感を生じさせ，また Woolf に Mansfield への軽蔑の念を生じさせたことは確かであろう。

さらに，Mansfield が過小評価されてきたことの原因を，Pamela Dunbar は，短編小説を評価しないというイギリス文学の一般的傾向に加えて，植民地出身の Mansfield の当時のイギリスの社会における周辺性に見ている(xiv)。さらに Dunbar は，Woolf と Mansfield とでは，Mansfield の方がほとんど常に Woolf よりも早い時期に文学的な革新を行っていたにもかかわらず，社会的・文化的に安定した人物であった Woolf の方がそれらの革新を行ったと一般的に目されているといった，Mansfield に不利な文学的条件を挙げている(xiv)。Dunbar がここで指摘しているような Mansfield の周辺性へのバイアスを，Woolf もまた共有していたに相違ない。

Woolf が Mansfield に対して抱いていたバイアスがエスカレートし，嫉妬とも合わさって意識的な軽蔑となったと考える根拠となる記述を，1922年の日記に見出すことができる。「新聞の彼女の評価が舞い上がり，売り上げがむやみに高くなっているからといって何だというのです？ああ，しかるべきところに彼女を位置づけるいい方法を思いつきました。彼女が賞賛を受ければ受けるほど，彼女の劣悪さを強く確信するのです。」(*Diary,* 2: 170–71)という Woolf の記述に，Mansfield をあえて低く評価したいという意志が見られる。そしてその軽蔑への意志は，Mansfield には知性が足りないとする見方へと発展する。Woolf は，*Between the Acts* に登場する自然児 Mrs. Manresa に，言葉のない思想など高尚すぎて理解できない(50)と言わせ，彼女の知性の欠如を印象付けている。Mansfield をモデルとして造形した人物に知性の欠如という特性を付与したことに，知性の足りない作家であるという Woolf による Mansfield 観との連続を指摘することができる。そしてまた，Mrs. Manresa だけではなく，Minta もまた，無知な女性であるとして描かれていることにも，同様の指摘が可能である。Minta は，実際

に無知であるだけでなく，実際以上に無知に見せて Mr. Ramsay の歓心を買おうとしている女性として描かれている。男性の歓心を買いたがる女性という Minta のこうした性質は，より極端なかたちで Mrs. Manresa に引き継がれ，彼女は色欲が強く，女よりも「男の方が好き——はっきりと」(36) という女性とされている。

6

Mansfield は，「彼女を苛立たせもし，支えもした彼女自身の家族であるブルジョワのニュージーランドと，未熟で，支配されていないし，洗練されてもいないが故に彼女をひきつけたであろう野生のニュージーランドの両方の彼女のニュージーランドをヨーロッパに持ってきた」(256–57) と Mark Williams は指摘しているが，Mansfield の「野生のニュージーランド」を，Woolf は「野蛮」と見た。が，ここで注目したいのは，Mansfield の持ち込んだニュージーランドの洗練と非洗練，文明と非文明の共存は，それ自体がモダニズムの複合的なあり方とパラレルになっているということである。Woolf は Mansfield のなかの「野蛮」を毛嫌いしつつも，その「野蛮」のなかにこそ，新しい風を吹き込む可能性を見出していたのではないか。それは，誰もが「礼儀作法違反とそれが吹き込む新鮮な空気を利用して，砕氷船の航跡で飛び跳ねるイルカのように後に続くことができた」(37) と，Mrs. Manresa の言動が伝統のなかで生きる人々に開放感をもたらしたとして，*Between the Acts* のテクストにおいて評価されていることにあらわれている。*To the Lighthouse* の第三部で，Lily は，Mrs. Ramsay を回想しつつ，第二部で死んだ Mrs. Ramsay が，そして彼女の価値意識が，すでに古いものとなってしまったと総括する。家父長制の前提を転覆させるかのような Minta のありかたを思いつつ，Lily は第一部で結局仕上げられなかった Mrs. Ramsay とその息子の肖像という画題に，今度は新しいキャンバスを出して挑む。Ramsay 母子像とは，Mrs. Ramsay の溢れんばかりの母性を象徴するものであり，その母性とは，一方で，イギリス家父長制の支柱として称揚の対象とされたものであった。Mrs. Ramsay は，結婚しない女性は不幸であると主張し，Lily が結婚することを切に望んでいたが，彼女は結

婚しなかった。だが，彼女なりの充足感を得ている。このことが示すのは，イギリス家父長制を絶対視することへの疑念である。そんな Lily は，Minta の体制破壊的なあり方に嫌悪感を示すわけでもなく，賛同の意を示すでもなく，10 年前のテーマに向かいつつ，過去から物語上の現在までを語る。最終場面で Lily は絵を完成させるが，それは描き直しではない新しい母子像，新しい家族観の創造のメタファーである。この絵のような，描き直しを超えた新たな創造への希求の結果とは，決して一枚岩ではなく，様々な対立と矛盾を抱え込みながら存続するモダニズムのありかたを是認するものである。それは，すなわち，文化レベルでの反抗をも抱え込むモダニズムの新しい可能性を示唆し，帝国主義時代のイギリス至上主義あるいはヨーロッパ中心主義の転覆の契機を内包しているのだ。

《注》

（1） 改訂したものが，“Modern Fiction” として評論集 *The Common Reader* (1925) に収録されている。

（2） 1910 年 11 月 8 日から翌年 1 月 15 日まで開催されていた「マネと後期印象主義美術展」を念頭に置いている。

（3） *The Waves* (1931) に登場するオーストラリアなまりを気にしている Louis にもまた Mansfield の一面が映し出されている。

（4） Mansfield は 1923 年 1 月 9 日に肺出血で死んでいるが，その 1 週間後の 1 月 16 日の日記で Woolf は Mansfield の死を悼んでいる (*Diary,* 2 : 225–27)。そのなかで，Woolf が，「それに彼女はたったの 33 歳だった。」(226) と書いている。年齢の食い違いはともかく，嫉妬したり，見下したりしつつも才能を認めていた 6 歳年下の作家の若すぎる死に，Woolf が非常に深いショックを受けたということはいえる。

（5） McLaughlin が “Same Job” で行ったように，両者の作品に見られるテーマやモチーフの点での共通項を探る，あるいは “Sisterhood” のように，彼女たちの作風の対応関係を検証して，両者のつながりを指摘したような，Mansfield の作品の影響が Woolf の作品に見られるといったかたちでの影響関係ではなく，Mansfield との交友関係が，あるいは Mansfield の存在が，Woolf の作品のなかにどのような痕跡を残しているのかということを本稿の関心事としたい。階級差については，Mansfield は裕福な家庭の出身であり，二人の間に階級差はなかったと Nóra Séllei は言っているが (51–53)，本稿では客観的にはどうであれ，Woolf が階級差を感じていたことに留意する。

（6） 作家としての嫉妬を Woolf が Mansfield に感じ，Woolf 自身その感情に悩んでいたということを，彼女の日記や手紙からもはっきりと読み取ることができる。たとえば，1920 年に Roger Fry に宛てた手紙には，「やっとのことで

彼女の物語に取り掛かりましたか？私はとても嫉妬深いので，そうして欲しいとは思えないのです」(*Letters,* 2 : 438)と Woolf は書いている。同年 12 月 16 日の *Times Literary Supplement* に Mansfield の *Bliss and Other Stories* の書評が載ったが，19 日の Woolf の日記には，「不誠実かつ誠実な手紙を Katherine に書いて彼女への嫉妬を引き抜いた。」(*Diary,* 2 : 80)とある。嫉妬を認めたくないかのように，1921 年の Vanessa Bell 宛の手紙では「どの書評も彼女を絶賛していますが，私は Katherine に全く嫉妬していません。」と書き(*Letters,* 2 : 454)，また，Mansfield の死から約 2 ヶ月経った 3 月 6 日の日記には，「私は今でも彼女を妬んでいるのだろうか？いいえ，私の年齢になると人は正直になれるのだと思う。」とある。そして V. Sackville-West への 1931 年の手紙には，「彼女がちょっとした物語を群れのように発表したときだけは，きっと私は嫉妬していた」(*Letters,* 4 : 366)と書いている。だが，Woolf の嫉妬とは，Mansfield の才能を認めたからこそのものであるということが，すでに見た Mansfield の死から 1 週間経過した日の日記の「私は彼女の文章に嫉妬している—これまで私が嫉妬した唯一の文章だ。」という記述から窺える(*Diary,* 2 : 227)。

引用文献

Alpers, Antony. *The Life of Katherine Mansfield.* Oxford: Oxford UP, 1982.

Beer, Gillian. *Virginia Woolf: The Common Ground, Essays by Gillian Beer.* Edinburgh: Edinburgh UP, 1996.

Booth, Howard J. and Nigel Rigby. ed. *Modernism and Empire.* Manchester: Manchester UP, 2000.

Bradbury, Malcolm and James McFarlane. "The Name and Nature of Modernism." *Modernism: 1890-1930.* Ed. Malcolm Bradbury and James McFarlane. Harmondsworth: Penguin, 1983.

Dunbar, Pamela. *Radical Mansfield: Double Discourse in Katherine Mansfield's Shorter Stories.* London: Macmillan, 1997.

Gay, Penny. "Basterds from the Bush: Virginia Woolf and Her Antipodean Relations." *Virginia Woolf: Emerging Perspectives.* Ed. Mark Hussey and Vera Neverow-Turk. New York: Pace UP, 1994. 289-95.

Haller, Evelyn. "Virginia Woolf and Katherine Mansfield: Or, the Case of the Déclassé Wild Child." *Virginia Woolf Miscellanies.* Ed. Mark Hussey and Vera Neverow-Turk. New York: Pace UP, 1992. 96-104.

Johnston, Judith L. "The Remediable Flaw: Revisioning Cultural History in *Between the Acts.*" *Virginia Woolf and Bloomsbury: A Centenary Celebration.* Ed. Jane Marcus. Bloomington: Indiana UP. 253-77.

McLaughlin, Ann L. "The Same Job: The Shared Writing Aims of Katherine Mansfield and Virginia Woolf." *Modern Fiction Studies* 24 (1978) : 369-82.

——. "An Uneasy Sisterhood: Virginia Woolf and Katherine Mansfield." Virginia Woolf : *A Feminist Slant.* Ed. Jane Marcus. Lincoln: U of Nebraska P,

1983. 152–61.

Moran, Patricia. *Word of Mouth: Body Language in Katherine Mansfield and Virginia Woolf.* Charlottesville: UP of Virginia, 1996.

Root, J. W. *The Trade Relations of the British Empire.* Liverpool: J. W. Root, 1903.

Séllei, Nóra. *Katherine Mansfield and Virginia Woolf : A Personal and Professional Bond.* Frankfurt am Main: Lang, 1996.

Smith, Angela. *Katherine Mansfield and Virginia Woolf: A Public of Two.* Oxford: Clarendon, 1999.

Stevens, Wallace. *The Necessary Angel : Essays on Reality and the Imagination.* London: Faber, 1951.

手塚裕子「Katherine Mansfield と Virginia Woolf 再考」『川村学園女子大学研究紀要』第 11 巻　第 1 号（2000）: 51–67.

———.「ヴァージニア・ウルフの嫉妬——V・ウルフと K・マンスフィールド——」『ヴァージニア・ウルフ研究』第 12 号（1995）: 12–26.

Williams, Mark. "Mansfield in Maoriland: Biculturalism, Agency and Misreading." *Modernism and Empire* 249–74.

Williams, Patrick. "'Simultaneous Uncontemporaneities' : Theorising Modernism and Empire." *Modernism and Empire* 13–38.

Woolf, Virginia. *Between the Acts.* Ed. Frank Kermode. Oxford: Oxford UP, 1992.

———. *The Diary of Virginia Woolf.* Ed. Anne Olivier Bell. 5 vols. Harmondsworth: Penguin, 1979–1985.

———. *The Essays of Virginia Woolf.* Ed. Andrew McNeillie. Vol. 3. San Diego: Harcourt, 1988.

———. "George Eliot." *The Essays of Virginia Woolf.* Ed. Andrew McNeillie. Vol. 4. London: Hogarth, 1994. 170–81.

———. "George Eliot (1819–1880)" *The Essays of Virginia Woolf.* Vol. 3. 293–95.

———. *The Letters of Virginia Woolf.* Ed. Nigel Nicolson and Joanne Trautmann. 6 vols. San Diego: Harcourt, 1975–1980.

———. "Modern Novels." *The Essays of Virginia Woolf.* Vol. 3. 30–37.

———. "Mr Bennett and Mrs Brown." *Virginia Woolf: A Woman's Essays.* Ed. Rachel Bowlby. Harmondsworth: Penguin, 1992. 69–87.

———. *Mrs Dalloway.* Ed. Claire Tomalin. Oxford: Oxford UP, 1992.

———. *To the Lighthouse.* Ed. Susan Dick. Oxford: Blackwell: 1992.

———. "A Room of One's Own." *A Room of One's Own and Three Guineas.* Ed. Michèle Barrett. Harmondsworth: Penguin, 1993. 3–114.

———. *The Waves.* Ed. Kate Flint. Harmondsworth: Penguin, 1992.

Minta in *To the Lighthouse*:
Woolf, Mansfield, and Modernism

Rieko Sakakibara

Abstract

The representation of barbarous and lustful Mrs. Manresa in *Between the Acts* reveals Virginia Woolf's bias against the colonials. The bias is included in the representation of Minta in *To the Lighthouse* as well as that of Mrs. Manresa. My purpose of this paper is to reinterpret the representation of Minta in terms of modernism and imperialism taking into consideration of Woolf's complex friendship with Katherine Mansfield, a modernist woman writer who is from New Zealand. The object here is to argue that Minta, the cultural other in *To the Lighthouse*, is provided with the subversive potentiality of the established order, that is, the English patriarchy and the Eurocentrism.